

---

**あれ.....ここはどこですか？**

Sonnet

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あれ……ここはどこですか？

### 【Nコード】

N8678Y

### 【作者名】

S o n n e t

### 【あらすじ】

気が付くとそこは病室の片隅。何時の間にやら俺はネギになっていた！しかもここはただの『ネギま』の世界ではなかったようです……ネギの珍道中、始まるよ！

## 第1話 輪廻転生……？

「……ん？ここは、病院……？」

ついさっきまで俺は何か別なことをしていたはずじゃ……嗚呼、頭の中に靄みたいな、霞がかっているような感覚がしてまともに考える事ができない。いや、それでも記憶が断片的にだが浮かび上がってきた。そう、たしか俺はあの時

「ネギ!!」

「うわっ!!」

やつとのことかと思いだ仕掛けた俺のメモリアルは、ドアを蹴破るかのように入ってきた謎の人物Aによって欠き消されてしまった。それに俺の名前はそんな焼き鳥屋に出てくるような名前じゃ有りませんよ。

2

……おや？この人、どこかで見たことあるような……いや、たしか俺の事をネギと呼んだか？ハッ!?まさか、MA・SA・KA!?

「ネカネ、さん？」

「どうしたの?どこか痛いのか？」

現状、納得できないが理解した。ここは『魔法先生ネギま!』の世界だ。

どうして俺が漫画の主人公という立場に立たされているんだとか、前の俺はどうなってしまったんだとかを誰かに問いただいたいのが正直な気持ちなんだが……そんな事を気軽に聞けるような相手が近

くにいない。いるわけもないって。病室の一角で「俺はネギじゃない」なんて叫んだ所で魔法を使って「痛い痛い飛んでいけ」だ。最悪、記憶を失わされてしまうなんて事になれば、笑い話にもならない。

「仕方無い……か」

「ネギ？」

「え？いや、何でもないよ！ナンデモ！」

「そ、そう？」

ぬう……俺は　　と言う名前だったが今はネギ、ネギ・スプリングフィールドなんだ。初級魔法やら周囲の簡単な人物関係ぐらいならまだしも、小さな子供がらしくない言動をするのはまずいのか？

嗚呼、ネカネさんが心配しているのが幻聴で聞こえてきそうな視線を送ってくるのはやめてください。自分が腐ったミカンみたいな存在だつてのは理解してますから。……それより、今はどんな状況なんだ？

「あ……」

駄目だツ……1ミリたりとも前の記憶ネギが浮かんでこねえ！肺から空気を絞り出すのと同時に発声してみたが、それは自身にとっては無意味どころかマイナスになってしまった。

「ねえネギ、本当に大丈夫？お医者さん呼べば良い？」

「本当に大丈夫だから心配しないで！ね、お姉ちゃん」

嗚呼……この年になってから『ね』なんて言うことになるとは。

取り敢えず！病院にいることからあの忌まわしき悪魔襲撃事件が過ぎ去ってしまったと考えておこう。いや、過ぎていることをガチで祈る。ほとんどの村人が石になるとはいえ、そうそう人の死に目には遇いたくはないし、ネギの能力をフル活用しても所詮は子供……ハイスベックできることは限られているしな。

そんなネギの周囲にいた人の中でも比較的ネギがなついていたのは、たしか……

「ねえ、ネカネお姉ちゃん」

「どうしたの？」

「スタンおじさんは？」

「え……ああ！スタンさんなら元気にしてるわ！もちろん、他の皆もね」

「そう、なんだ……」

ネカネさんの視線が不規則に宙を泳ぐ。表情も無理に作っている感じがする笑顔だ。……良かったー！！凄い不謹慎な発言だったのは理解しているが、それでも叫ばずにはいられない。これから先に悪魔襲撃が無くなってえがったよー！！無論、心の中で叫んでるよ？

でも、これからどうしようかねえ……確か、また悪魔襲撃が起こることの無いようにメルディアナ魔法学校の校長がネギに入学を進めるんだっけ。ネギじゃなくナギの息子だと思われる予感がピンピンなんだが。ううわあ……この歳にして周囲との確執を体感せにやならんとは……鬱だ。

だが、それでも！念願の魔法が使えるんだから嬉しいことこの上ない！現実じゃある不名誉な条件を満たして30歳を迎えることで

魔法使いになると言われていたが……フフ、今となっちゃんあ良い記憶だぜ。

「ねえネギ」

「何？」

「メルディアナの学校の校長からんだけど、魔法学校に入学するつもりはないかって」

来たあ！有り余る才能を開花させるためのプロセス。さっすがネカネさん、空気が読めるねえ……胃に穴が空くかもしれないプロセスでもあるが、気にするもんか！穴が空いても魔法で治せば良いんだよ。そんな魔法が……無けりゃ創る！

「魔法学校に？僕、ネカネお姉ちゃんと一緒にメルディアナに行きたいな」

ふう……3〜4歳くらいの子供だったらこんな感じで反応するかな。

「ぶふうっ」

「あれ……お姉ちゃん？ねえ、お姉ちゃん？」

ネカネさんがいきなり前のめりに倒れました。俺には何が起きたのかさっぱりで、何が起きたのか理解できません。除きこんだらネカネさんの表情が紅くなって、何かに悶絶しているように見えたのも間違いじゃないかな？……唯一の頼れるお方がシヨタコンだとは考えたくはないでござる！

「心配させてごめんなさいね。もう大丈夫だから」

心配なのは貴女の性癖ですよ。

あの後、いくら呼び掛けても反応を示さないネカネさんに業を煮やした俺が手元にあつたナースコールに手を伸ばし、躊躇うこと無く押してやったのだ。当然、何かが起きたのかと駆けつけてくるナース達……若い人はあまりいなかったようだが、ベッドの脇で倒れ付いたネカネさんを見て慌てて連れ出していった。

……元氣そうでナニヨリですが、どうせだったらシヨタ疑惑もぬぐいさつて、るよな？子供には見せられない教育現場の実態！みたいなことになってねえよな！…俺は何を言ってるんだ？

「ねえ、お姉ちゃん」

「なあに？」

「僕、お姉ちゃんの魔法を教えてほしいな」

まず最初は近くににいる人が使っている魔法でも学んでみるか。記憶がないから魔力の運用方法も分からんし、言葉として覚えているのは『魔法の射手』と『雷の暴風』、『千の雷』だ。漫画を読み込んだからこの3つはラテン語も覚えてる。が、全部が攻撃魔法の上3つの内2つは中級以上の魔法。練習する場所なんざありやしねえ。

現代生活において使えるレベルの魔法から徐々に学びたい。簡単な重力制御魔法や治癒魔法、本や食材を半永久的に保存するための魔法等々。後は体の成長を促すためにも武術を修めたり、対魔・対物障壁の強化をしたり……あれ？俺、寝る時間あんのか？

「良いわ。魔法学校に行くんだつたらネギも魔法を習うんだし、簡

単な魔法だったら私が教えてあげるわ」

「ありがとう、お姉ちゃん！」

「……あら、なぜだか鼻血がでてきたわ。なんでかしら」

あんたがシヨタコンだからだよ！！

「ネギーー！」

ひとりネカネの痴態に呆れていると、ある少女が燃えるような赤い髪を靡かせながら勢いよく扉を開けて入ってきた。ええと、見た目からしてツンデレ少女、もといネギの幼馴染みのアーニヤに違いない。

「もう、心配したんだからね！いつもいつもネギは周りに迷惑ばかりかけるんだから」

入ってくるなり一人でぶつくさ言い始めるアーニヤ。もう最初の部分以外は過去の話のようだから、要所要所だけを聞き取りながら他は全部聞き流す。誰が好き好んで真つ正面からツンデレの相手をせにゃなんののだ。ただでさえ面倒な感じが漂っているシヨタコ……ネカネさんがいるつてのに、……あれ、ネカネさん？

「お、お姉ちゃん？」

「……ウフフ、ネギは可愛いわねえ」

ファット！！……それは脂肪か。

ファツキン！！どこか近くにまともな人は居ないのか？誰か、この際俺の主治医でも良いからこの状況から助け出してくれ！……ん？

「んう？」



「…………ネギ？」

なん、だ？頭が痛くなってきた…ぐぬ、次第に激しい痛みが…いや、こりゃただの頭痛じゃない。記憶の波が、ダムが決壊したかのように流れ込んでくるんだ！俺は今4歳だと言っ記憶が一番に思い出されたが、つまりは脳もそこまで発達しているわけでも無いから、処理能力が追い付かない。

「ぐ、うづうづ……………」

「ちよ、ちよつとネギ、大丈夫なの？」

頭を抱えるように前のめりに倒れた俺の様子に異変を感じたアーニヤが話しかけてきたが……そう見えるんだったら眼科に逝きなさい。もしくは誰か大人を、医者を呼んでこい。嗚呼、痛みで言葉を口に出すこともできない。

どんどん大きくなる痛みで今にも気絶してしまいそうだが、まるで思考と身体が分離されているかのように冷静に物事を考えることができる。

「ぎ！ぐうづ……………はあ、はあ……………ふう。もう大丈夫だよ。心配させてごめんね、アーニヤ」

「ふ、フン！ホントよ！あまり心配させないでよね！」

はいはいツンデレツンデレ。

それは兎も角、ようやく痛みが収まってきた。息を整えながらその記憶を一つ一つ整理していこう。

えっと、俺がネギになる直前、家の中で亡くなったと……………なん、だど？死因、心臓発作。それはまだ良い……………何なんだ、死神の手違

いって！ふざけんな！オウ、ザツクレイジーなんて笑い飛ばせる  
と思ってるのか！？

……まあ、納得できないが既に過ぎてしまったことだ。次にいこ  
う。  
としての意識が覚醒するのは悪魔襲撃事件直後で、  
情報の凍結もほぼ同時に。……そうか、さっきの頭痛はこれが原因  
か。

でと、次が最後か。三つ目は……才能の付加？何々、『魔術』『  
体術』『創造』……他にも試してみなければ分からない物も上から  
羅列されて浮かんできたが……あれ？俺のハイス<sup>ネキ</sup>ペックがチートされ  
たぞ？いいのか、主人公がこんなにバランスブレイカーな能力を兼  
ね備えてても。……嗚呼、『俺』と言うイレギュラーがいる時点でこ  
の物語は一つの平行世界とでも言えるか。

ま！取り敢えず長く、太く生きられるよう努力はしてみようかな！

9

「ウフフ、ネギは可愛いわねえ……」

何だろう、急に不安になってきた。誰かこの人を正しいレールに  
軌道修正してくれないかなあ……

## 第2話 確認

俺がネギとして目を覚ました後、俺のことを担当してくれている医師によつて3日の入院が告げられた。あの事件で負った傷は全身至るところにあつたようだが、ほとんどが擦り傷だったため既に完治しているのだが、目覚めてすぐに頭痛があつたと言つと、一応経過を見ることになつたのだ。

その間、俺を心配して見舞いに来るネカネさんの相手をするのに神経を磨り減らしたが、魔法の事を聞いたり、自分の能力について確認できたからちようど良かったのかもしれない。……いちいち鼻息を荒くしないでほしかったが。

まず第一に聞いたのは魔力制御についてだ。ネギの記憶では基礎魔法である『火よ灯れ』の練習をしていたようだが、ネカネさんの話を聞く限りではあまり良い訓練とは言えないようだ。そもそも、詠唱自体に『火』と明記されていることから分かるように、下級ではあるが『火よ灯れ』は列記とした火系統魔法。人によつて得意不得意な系統があり、火系統が苦手な人には『火よ灯れ』ができるようになるまでに数カ月を要する人もいるようだ。

(確か、ネギは風・雷・光が得意だつたような)

だから原作を思い出しながらこの3系統の基礎を学びつつ魔力制御を極めることにした。

昔アーニヤに貰つた初心者用の魔法ステッキ 20cmくらいの白く細長い棒の先にちよつとした魔法発動体がついてある。で魔力の流れを感じとりながら練習する。室内、それもベッドに横に

なった状態では風・雷系統は控えないといけない。よって、選択する魔法は自動的に、

「プラクテ・ビギナル、光よ！」

と言った比較的被害の少ないものになる。

「ぬあああ！？目が、目がああ！」

気を付けなければ自滅するのが落ちになるため、そこら辺は注意しなければ。……ガチで失明する可能性もあるなあ……

あと、魔法に関してあまり系統による影響は受けないらしい。例えば、水と火。一般的に考えれば水の方が有利だと思うかもしれない。しかし、魔法は魔力を以て組まれた弾丸。それを射出する担い手の力量　魔力量、魔力密度、魔法陣の精密度など　によって勝敗は決まるようだ。

魔法なら真空状態ですら火が灯るのだから自然の摂理を蔑ろにしているようなものだ。

ただ忘れちゃならんのが古来から日本に伝わる太陰道や五行と言ったものだ。これらは魔力ではなく『気』を用いる。森羅万象全てのものに気は宿っているという思想は自然の摂理に従っており、極めれば絶大な力を得られるだろう。……魔法使いが多いこの地に、気を主体として戦闘する人が少ないのは残念だが。

この2つの力は互いに反発し合うため、普通であればどちらか片方の才能を伸ばしていくのだが、もし反発し合うもの同士を一つにする事ができたら……？

「(コンコン)」

木製の戸をノックする音が室内に響く。淡々と業務をこなしていく看護師なら戸を叩く必要がない。ネカネさんやアーニヤが来る時間帯ではないし、村人はほとんど石と言う名の闇の中。

「どうぞ」

「失礼するよ」

入ってきたのは、記憶には有るが今まで会ったことの無い初対面の男性。その人は俺を視界に留めるなり柔らかい笑みを浮かべた。一瞬、俺を通して誰かを思い浮かべたようだが、気にしないで流そう。てか、なんでここにこの人がいるのか分からないから気にする余裕も無いんだが。

「初めまして、ネギ君。僕は高畑・T・タカミチ。タカミチって呼んでくれ」

「こちらこそ初めまして。ネギ・スプリングフィールドです」

タカミチが目を見開く。どうせ、重ね合わせていた人物との性格が正対だからだろう。強大な魔力を持っていても当の本人<sup>ナギ</sup>が覚えているのはたった5〜6個の魔法のみ。さぞかし、紅き翼の頭脳派は苦勞したことだろう。

嗚呼、それと……さっき述べた魔力と気の合成だが、通称『咸卦法』と呼ばれており、身体の内と外に咸卦を纏うことで普通では考えられない程の強大な力を得られる、高難度技法だ。それを修得しているのが目の前にいるこの男性、高畑・T・タカミチだ。

だからと言っても、あまり羨ましいとは思わない。修得するのに数年は掛かると言われているし、実際この人も数年の歳月を掛けて

修めているし。それに、数段劣るとは言え身体強化の魔法はしっかり存在している。まあ……先天的に魔法が使えない人等のためにあるよう感じだな。

……取り敢えず、子供っぽさを全面に出しといたほうが今んとこ楽かな。

「タカミチは、魔法を使えるの？」  
「え……っと、僕は魔法を使えないんだ。生まれつきでね」

フフ、子供は無邪気なものよなあ。時として子供は残酷だが悪気はないからね……項垂れてる感と言うか、ブランコに座ってやるせなさを醸し出してる会社員みたいだぞ、タカミチ。俺は8割悪気で構成していたがね（笑）

「でも、僕は気の扱いが得意なんだ！魔法は見せてあげられないけど、今度実演してあげるよ」

嗚呼……必死に長所のアピールをし始めたよ。笑顔で頑張るなあ、タカミチ君も。

「おっと、そろそろ時間だ。僕はここらで帰るとするよ」  
「うん、わかった。また今度ね」

……さて、奴は行ったか。どうせだったら先に気を見せてほしかったが。……また一人になるのか。暇なんだよなあ……すること無し。

「プラクテ・ビギナル、光よ」

今度はさつきより発行量が抑えられたから目を覆う必要もないし、どっかのグラサンが掛けてるサングラスも必要ない。誰かが来るまでこれで魔力の運用方法とか流れでも確認しとこうかな。魔力量はできるだけ少なく、それでいて十全に効果を発揮できるようにする。例えば、最初MPを10必要としたメラミが、同じ威力のまま半分の魔力で繰り出すことができるようになったり、広範囲魔法の効果を一気に集中させることで威力を高めたりすることができる。

……あと知ってるか？魔力って、実は視認できるんだよ。気はどいうものか分からないが、魔力はほんのりと白い輝き放っている。何か集中してたら見えるようになってしまったんだ。

制御できずに漏れ出してしまう魔力なんかがそれにあたる。魔法使いなら魔力を察知できるだろうし、だから原作では近衛木乃香の場所は直ぐに見つかってしまったのだ。明日菜と一緒に部屋に住まわせていたのは、魔法無効化能力で漏れ出る魔力の感知をさせないためだったのか？

……いくら考えても仕方がないか。なら今その話は脇に置いて……魔力制御が未熟なため、ステッキの先に適量だと思っ魔力を集中させてもドライアイスが昇華するかのよう無色の魔力が漏れ落ちていく。

「……熱血キャラは俺に合わないんだけどな」

いく先々に死亡フラグが立っている英雄の息子だし、少しくらいは努力しないとアカンだろうな。ま、焦らずじっくりと魔力制御から始めようかね。

『光よ』で魔力がどんなものは把握できたし、今は魔法を唱えないで魔力だけステッキの先に集めてみようかな。……いや、ただ集めるだけだと漏れるのか。なら、より魔力を籠められるように圧

縮？練る、とでも言おうか。

一点に集まるように、その後でその魔力が螺旋を描くように舞わしながら練る。魔力の密が粗いところに魔力を塗り込む。ただひたすらこれだけを繰り返す。

……集中、集中、集中……

(ビシツ……バキン！)

「ぬあ!？」

今起きたことを、あ、ありのままに話すぜ！自分でも良く分かんなかったが、手に持っていたステッキの先端、星形の部分に罅が入ってそのまま壊れちゃった！

……明らかに魔力を籠めすぎが原因だな。こりゃステッキくれたアーニヤに怒られちゃうな(笑)

そう言えば、ネギがお父上に渡された立派な杖はどうなってるんだろうか？『杖よ』とか唱えれば飛んできたりするの？……いや、原作だと杖の場所がわかってから呼んだか？……この辺りに無いし、いきなり飛んできて窓とか壊したくないからやめとこ。

「ネギ！さっきすごい魔力感じたんだけ……ど」

あ。

……てへ、見つかつちゃった(笑)

壊れたステッキを見て変な誤解をしたアーニヤの追求をのらりくらりとかわしていたら、今度はネカネさんが入ってきて大変なことになってしまった。倒れるわ泣くわ、どさくさに紛れてキスしようとしてくるわ。……耐えられッかな、俺？主に理性が。



だが、俺はこの苦行を切り抜けたのだ！それをダイジェストにお送りしよう。

・ネギがアーニヤを（適当に）誉めた。

アーニヤの特殊技能”ツンデレ”が発動！常時独り言が紡がれ、球面上の障壁が展開した。またの名を”お母さん、あれなに？シツ！見ちゃいけません！”だ。

・ネギの”上目遣い”！

ネカネの精神にブレイクショット。クリティカルだ！まともな正面から攻撃を受けたネカネはそのまま（鼻）血の海に沈むのだった

……

・ネギの最終決戦奥義！”ナースコール”！

予備動作も何もない攻撃は二人に絶大な効力を発揮！なす術も無く、二人は影も形も残さず消え去って（ナースに連れられていつて）しまった。

「嗚呼……暇だなあ」

何か、少し前に可笑しな出来事があった気はするけど……なんかあったっけ？

あ！……ステッキが無いんだっけ。あれが無いと魔力制御の練習もできないし……って、なんで俺はステッキを持っていることを前提に話を進めてるんだ？

漫画で皆が当たり前のように媒体を使ってたからか？いや、それがこの世界では一般的なことなのか。……なら、世界初の試みをしてみようか？

身に魔法発動体を着けていないことを確認し、力を抜いた状態で右腕を前に伸ばす。人差し指だけを真っ直ぐ伸ばし、その爪の先に魔力が集めていく。

「スウ……」

大気に漂っている自然な状態の魔力。それを、酸素を取り込むように収集していく。

指先だけがほんのりと白く光っていたが、圧縮仕切れない魔力によって今は指の付け根まで白く輝いている。

どこまでも幻想的な光景だと、集中している頭の片隅にぼんやりと思った。

どれくらい集中していたか、どれだけ魔力が人差し指に集まったのか……そんなことはどうでもよくなっていった。ただただ目の前の事象に見惚れていて、つい、吐息が漏れてしまった。

漏れた吐息が指に掛かった瞬間、蓄えられていた全ての魔力が霧散した。

「……………は？」

渦巻いていたと言っても過言ではない魔力が、突拍子も無く消え失せてしまった。

「うわっ!?!」

こんなことって有り得るんだろうかと呆然としていると、いきなり目の前が真っ白に輝き始め、つい両目を閉じてしまった。そのまま数秒間じっとしていたが何も起きず、不審に思って目を開けよう

としたその時、

「初めましてだニヤ、マスター」

「……………ん？」

女の子っぽい声が聞こえてきた。呆けながら目を開けると、目の前に可愛らしい猫の姿が。

「く、か、可愛い……………！」

「ほんとかニヤ！んみゆ、嬉しいニヤ！」

前足で目を擦ってる姿、良いッ！

「ところで、君は？」

「僕はマスターの魔力で創られた精霊なんだニヤ。一応僕に名前はあるけど、マスターにつけてほしいニヤ」

魔力で創られた存在、だと？あれ、俺今精霊召喚魔法とか使っていないし、何かの魔法陣も描いてないんだけど。

「名前か……………ちなみに、どんな名前なんだ？」

「ケット・シーだニヤ」

……………ん？……………んん！？

「えっと……………何ができるんだ？」

「得意なのはキャットレインだニヤ。他にはケアルとかサンダガとかかニヤ」

完全にFFだー！！

混じってんのか、二つの世界は交わってんのか！？やめてくれよ……ここもかなり面倒な世界観に凸凹だらけのルートだけど、それにFFの世界観が混じったら血と涙の比率が倍ブツシュじゃねえか  
「安心するニヤ。この世界は『魔法先生ネギま！』を基本骨子として成り立ってるニヤ。だから他の物語が介入して無いは無いんだニヤ」

「……心を読まれた感じがするのは置いとくとして。どうしてそう言い切れるんだい？」

「えっと……この紙を見ると良いニヤ」

『拝啓 神です。』

この世界は完全に独立した平行世界です。

知識・新たな概念の提起・行動などは自由にしてくれても構いません。

忙しいの後は勝手にしてください。

幸運を祈る暇も無いので事前に付与しておきました。特別プライス今だけEX！』

……あれ？神、何か軽くな？

「つまり、マスターの吐息で魔法が成立したのはただの偶然だったんだけど、マスターは幸運だニヤ」

考えると言う行為が疎ましく思えてきた。嗚呼もうなんかどうでも良くなってきちゃったなあ……無理無理むりム……

「……君の名前はリムにしよう。理由は聞くな」

「ありがとうだニヤ！これからもよろしくニヤ！」

ふふふ……その純粋な瞳が俺の心に深く突き刺さってくるよ。

### 第3話 退院してから（前書き）

今さらですが、独自設定や解釈、開けてビックリパンドラボックス  
みたいな所も有りますが、何卒平にご容赦を。

### 第3話 退院してから

この世界で目覚めてすぐに見つかった我が相棒ことケット・シーのリム。精霊と言ったこともあってか、リムが見せようと思った相手以外にその姿は映らないようである。

四歳の俺がケット・シーを相棒にしますなんて言ったら、面倒臭い大人たちに捕まって完全に”立派な魔法使い”マキステル・マキコースにまっしぐらだったから良かったと思ってる。

それは兎も角として、ようやく俺は退院して自由の身になったのである！……ネカネさんは世話だと言ってベツタリしてきそうな雰囲気を漂わせていたが。まあ、この小さな身体ではできることも少ないし、ある程度ネカネさんの庇護下にいることにした。

今俺がいる場所もネカネさんの家になるんだが、メルディアナ魔法学校は寮制らしく、その内そっちに引っ越すことになるだろう。

資金が増え次第、ダイオラマ魔法球だったか、原作でエヴァンジェリンが所持していた所謂”別荘”を購入しようと思っっているが、ここで矢面に立ったのは『創造』という能力なんだが、これがまた驚くほど使い勝手の良い能力だった。

いいか？その例を挙げるぞ。

『そこら辺に落ちてる木の枝に魔力を籠めて創造すると世界樹の杖になった』

……良いのか？これ。ネギが麻帆良に赴任する頃には完全にパワーバランス崩れてるぞ。主に俺のせいだけだ。

だが、一応制限らしいものはあるようだ。無から何も造り出すことができないように、さすがに魔力だけで質量の持った物を創造で

きないようだ。リムは精霊召喚としてここに具現しているみたいだから例外だ。

つまり、『物質の質を最上級のものへと昇華できる』と言うことだ。化学で習う元素について深い教養があれば更なる効果を期待できそうだな。

これを知ってしまえば次に俺が渴望するのは陰陽道についての知識だ。原作のネギが編み出した『敵弾吸収陣』も陰陽道をなぞっているが、中でも『五行』について一番興味がある。

「水は木を、木は火を、火は土を、土は金を、金は水を生む。これが天地の間を循環流行して停息しない五つの元気」

「どうしたんだニヤ？」

「いや、陰陽道の五行にある『相生』って言う考えなんだが、これができる何でも創造できるようになると思ってな」

さすがに魔力で起こされる事象魔法を対象とすることはできないが、気と相反していることを念頭に置いて術式を組むことができるかもしれない。……ま、浅知恵から生まれた机上の空論に過ぎないだろうが、そのうち試してみよう。

「ネギーー、準備は大丈夫？」

「うん、今行くよ」

さて、ネカネさんにも呼ばれたことだし行きますか。メルディアナ魔法学校に！



(……俺は珍獣扱いにでもされてるんだらうか?)

嗚呼、非常に腹立たしいが子供で実践経験の無い俺にはこのストレスから解放される術を持ってない。

メルディアナ魔法学校に連れられてやって来た俺を待ち構えていたのは校長ではなく、英雄を夢想し借り物の正義を振りかざし、  
”立派な魔法使い”に至ろうとしている魔法使い有家無象どもだった。

好奇心、期待、羨望、妬み……全ての視線が見ているのは俺自身ではなく、ネギから感じられる魔力と”スプリングフィールド”  
と言つ血統だ。

(なありム……サンダガの攻撃範囲つてどれぐらいだ?)

(サンダガはねえ、大体7〜10m四方かニヤ)

「ぶはっ!」

「ネギ?」

「い、いや、何でもないよ」

「そつ?なら良いけど」

そつだ……サンダガはサンダー系で最強だったな。サンダー・サンダラ・サンダガの順だったか。

(そついや、もしサンダガを使ったとして、何回連続で使えるんだ?)

(僕自身にあまり魔力はニヤいけど、マスターとパスが繋がってるし……マスターの分も合わせて考えると………)

(ん?どした?)

(1000…5000かニヤア。んニヤ、10000は…50000?…分

かんニヤいニヤ！多分それ以上使えるけど、マスターの魔力が多すぎるんだニヤ）

サンダガー一回に消費するMPは確か53。それが5000以上だつてんだから……あ、頭痛くなつてきた。完全に世界のバランスが可笑しいし、超鈴音が過去にやつて来た理由の魔法世界崩壊も俺一人でどうにかなるんじゃないか？

『パンパカパツパパーン！魔力製造装置い』なんつつてな！

…… KO・RE・DA！

そうだよ。何も超鈴音が身体張って魔法暴露の術式を発動させようとする必要は無い。そんなの俺の手でぶっ壊してしまえば良いのか！創造に必要な機材は超に融通してもらえば良いんじゃないか！……いや、確かに理想論であることには変わりないが、一応この考えは心の片隅にでも留めておこう。

「ネギ、着いたわよ」

「うん」

さて、校長とやらはどんな人なんだろうか。

駄目だった。さすがに四歳の子供に魔法書庫ガキの閲覧許可を出すはず無いよなあ……麻帆良の妖怪ぬらりひょんだつたら腹黒い条件を付けつつも許可したと思えるんだが。

え？顔見せはどうなったかって？そんなの普通に挨拶して普通の

会話して少し面倒な入学手続きをネカネさんが請け負ってくれたぐら이다よ。まあ、俺を一人の子供として見てくれていたことは評価できたが……リムの事バシてないよな？

（それは大丈夫だニヤ。普通の人に精霊は見えニヤいし、僕自身にはあまり魔力はニヤいからね）

なら大丈夫か。

それにしたって暇だ。これから……否、今から何をしようか。近くには誰もいないし……居たところで今更純真な気持ちで周りの子供と遊ぶ気にはならんが。あ、そうだ！

（なあ、リム。確かファントムってバニシュ覚えてたよな？）

（うん。僕は覚えてニヤいニヤ）

リムが覚えてたらそれで良かったんだがな……バニシュで自分の姿を消して魔法書庫に忍び込んでやる！俺から漏れる魔力はリムに任せておけば、例えば校長だろうが気付けんだろっしな。

（なら、リムは召喚陣の描き方って分かるか？）

（必要ニヤいんだニヤ）

（え？ならどうやって呼び出せば）

（僕の時みたいに魔力を集めて、『ファントム召喚』で呼び出せるニヤ）

ワアオ、非常に簡単でよろしいでござんす。この世界の魔法と比べもんにならん程の詠唱速度だ。なんてったってワンフレーズ（笑）

「魔力……………ファントム召喚！」

言い終わると同時に、目の前で一筋の光が円柱となって立ち昇る。宙を舞う魔力が中央へ集まり形を成していく。次第に大きくなっていった白い光は、俺よりも頭一つ分大きくなったところで段々と色を付け始めた。

ドタドタ

ぬ……召喚時の魔力が伝わっちゃったか。最後までこの幻想的な光景を見たかったんだが、面倒な魔法使いどもに見付かることは堪えられんなあ。

……いやあ、こういう時こそ神に感謝しようと思えるんだよな。

”幸運EXは伊達じゃない”ってな

バニシュ

「ここか！」

顔に焦りを浮かべた二人の男性と目を細めて周囲を確認している校長の三人が、異変があったと思われる箇所に来て来た。しかし、あれだけの魔力のうねりが起こっていた辺りには何一つとして異変は起こっておらず、首を傾げていた。

「校長、確かこの辺りだったのでは？」

「うむ……俺もそう思ったんじゃないが、この辺りで魔法が使われている痕跡はおらん」

「では一体何が……？」

顔が隠れるくらい深くローブを被った男性が探索魔法をかけるが、校長が述べた事と同じ結果に辿り着き、ただただ疑問が浮かび上がるだけだった。

「ううむ……単なる偶然にしては魔力が多かったしのう。よし、少しの間学内の警戒を高めるんじゃ！」

「分かりました！」

「了解です！」

校長の言葉に二人の男性は了解の旨を伝え、すぐさま他の者達に念話をして、校長一人を残して走り去っていった。

残った校長は、一人思慮に更ける。

(ナギの息子のネギが来たばかりだと言うのに……あの元老院の作業じゃろうか？いや、それにしても早すぎるし、そのような事をするよりかは正面から圧力を掛けてくるであろうし……本当に、ただの偶然であってほしいものじゃ)

その頃

「しまった……魔法書庫がどこにあるのか分からないだった」

両肩にリムとファントムを乗せ透明な状態にあるネギは、それらしい場所を探して歩いて見付けられずに迷子になってしまったとさ。

## 第4話 メルディアナにて

あれから暫く書庫を探し歩き、やっとの事で見付けた書庫に誰にもばれることなく不法侵入<sup>入り込み</sup>し、ぎりぎりネカネさんに心配されない時間までそこに入り浸った。

限りのある時間でどれだけの本を読めるのか……と思考え付いたのは、マルチタスクで思考の幅を広げ、更に自分の速度を速めるヘイストだった。結果、すぐ使えたよ。俺、狂喜乱舞。

自分の身体を透明にするバニシユの効果はこの世界の魔法体系からすると”有り得ない”ことになるので、ここの魔法使いたちの凝り固まった先入観を上手く突いた形になった。……不法侵入は未だに続いている。

子供の脳は半端ないね。砂が水を吸うようにどんどん知識を吸収するわ、逆に脳から知識がこぼれ落ちることが無い。脳医学に喧嘩売ってんのかつてぶん殴られそうだが事実だから仕方無い(笑)

元の世界では漫画の中の存在だったから、子供の頃に抱いていた憧れに似た感情が余計勉強へのめり込ませていく。だから、この魔法使いによる魔法の講義はどのようなものと高い期待を持って望んだ……

(嗚呼……暇)

俺が馬鹿だった。

魔法の授業とはどのようなものかと期待していたんだが、これだと餓鬼のお遊びに近いものだ。俺自身餓鬼だから仕方無いっちゃ仕方無いんだが、まあ……基礎は大事だしな。

でも分かったことはある。メルディアナ魔法学校は悪い意味でM

M元老院に毒されてきている。

『どれだけ魔法が優れているか。どれだけ我々の正義が素晴らしいものか。どんなに悪が汚らわしいものであるか』

はつきり言って子供が学ぶようなことではない。原作でネギが魔法Ⅱ善と考えていたり、魔法の秘匿意識が低かったのもこれが原因なのだろうと思う。……MMは自分たちが度しやすい駒、使い勝手の良い人材を造るためにこうしてこの魔法学校に人を送り込んでるんだろう。

彼等の授業には決定的に欠けているものがある。それは”危険性”だ。一般的な学校だと、怪我をすると大変うんたらと言って暴力の危険性について説明する。

しかしだ。今まさに説明を聞いてるが何一つとして魔法の危険性を語らない。いや、意図的に触れないようにしているとも感じる。<sup>アラルブラ</sup>紅き翼という英雄の力を絶対視させ、あたかも魔法が万能であるかのように思わせる。……まんま洗脳だな。

「プラクテ・ビギナル、火よ灯れ」

得られる知識が無いと判断し形だけ真面目に授業を受けている俺は、適当な量の魔力だけを初心者用のステッキに籠めて魔法を唱える。まさに雀の涙程の魔力量だが、正義史<sup>自分</sup>上主義のボンクラは喜色満面で俺を見てくる。

「さあ、皆も彼と同じように魔法を唱えるのです！大丈夫、簡単なものだからすぐにできるようになりますよ」

『はい！』

ううむ……あのニヤけ具合からだ、英雄の息子に魔法を教えた自分には将来多大な箔が付くはずだと考えているに違いない。……

いや、実際付くんだろ？が書庫で読破した魔導書に載ってた術式とFFの魔法とかは既に使えるわけ。

少なくともあの教師よりは魔法に詳しいし、（個々に合った物だと面倒だが）より効率の良い訓練法も立てられる。

（禁術扱いになってる魔導書も読めたしなあ）

魔法を学んだからこそバニシユの効果には舌を巻くが、これは学校側の怠慢だと言わざるを得ない。いや、まあ……FFにある『自分以外の時間の流れを止めてしまう』クイックという魔法は反則だと思っただけどね。勿論、使ったさ。

分かりやすい……かどうかは個人の感性に委ねるが、FFの知識で説明しよう。

まず初級攻撃魔法”サンダー”はMPを6消費する。真ん中飛ばして上級攻撃魔法”サンダガ”がMP53消費するのに対し、間接魔法”クイック”は何とMPを99も消費するのだ！

……それでも2500回以上クイックを使用できる計算なんだけどねえ。パワーの超インフレだ。

話しは変わるが、バニシユを使って学内を散策しまくっていると地下に忌々しいものを見つけてしまった。

”悪魔伯爵”ことヴィルヘルムヨーゼフ・フォンヘルマンによって”永久”石化を掛けられ、解呪法が分からず長い間石像のまま安置されている村人たちだ。

（……石になってた村人の数は約150。五行も分かったし、創造



で『金の針』か『万能薬』造れないかな)

石化自体に苦い感情を抱いたわけではない。その現実を受け止めず、未だに魔法万能説を詠っている奴らがいるという事にだ。まあ、ネギの村を襲った黒幕は既に証拠を隠蔽しているだろうし、世間に”大勢の悪魔が襲ってきた”だとか”ナギが現れた”なんて情報は出回ってないから仕方無いかもしれんが。

「プラクテ・ビギナル、火よ灯れえ……」

それにしたって暇だなあ。あの教師、名前知らんがツラずれないかな……あ、今俺上手いこと言わなかった？

所変わって場所は、形式的に俺に宛がわれた自室。

なぜ4歳児の俺に宛がわれたかと言うとだ……どうにかして俺と同室になりたがったネカネさんは校長とO H A N A S Iをしてきたが、そこに(性的に)ただならぬ様子に危機感を抱いた校長は、ある程度生活に自由の幅を持たせることを理由にして一人部屋を宛がった……という、なんともしょうもない理由だ。

あんな美人になら!と思わないでもないが、無理矢理はダメ。絶  
対。

それは兎も角、自室を持てたことは非常にありがたい。そこら辺から材料掻っ払ってきたりするものを置く場所になる。その内、影魔法の修得して王の財宝みたくに物を収納できるようにしたいが、

それまでの期間はこの部屋を活用しよう。

でだ。部屋を見渡してまず最初に見付けたのはナギが使っていた杖だった。正直、いららないです。

幾多の戦場を駆け回ったナギが使っていたこともあり、杖としての価値は非常に高い。しかし、数年後に麻帆良に行くつてのに、魔法の秘匿云々はどうした？と言われても可笑しくない長い杖なんざ持ち運ぶかってんだ！

……嗚呼、何か今嫌な予感が。

(リム、ファントム。この部屋、何か変な感じしないか？)

(誰かに見られてるニヤ。一つ……じゃニヤくて、二つだニヤ)

(二つとも魔法。機械無い。破壊、可能)

(いや、壊さなくても良いよ)

むう……警備か何かは知らんが、プライベートな部分まで観られたくはない。かといって魔法を打ち消してしまえば変な思惑が、俺の預かり知らぬ所で飛び交うに違うまい。そうなったら余計警備が増えそうだし……

(いつそのこと、幻惑系の魔法でも応用させて乱よゲフゲフ……利用しようか)

なんとなく幻惑魔法は高い技術が必要そうだなあ……なんて思ってるその貴方！実は、幻惑魔法は簡単にできてしまうのだよ！……誰に向かって喋ってたんだ？俺は。まあ良い、説明を続けよう。

幻惑魔法に置いて高い技術が必要となるのは、対人において相手を惑わせる時だ。と言うのは、相手だって好きで幻惑魔法に掛かり

たい！なんて言う奴はまずいないだろうし、だからこそ魔法をレジストして打ち破る。

だから幻惑魔法は相手よりも自分の実力が高い時や、相手の隙や油断を突いたりしない限りは魔法に掛からないのだ。

そんな場合を除けば、幻惑魔法は少し魔法をかじった程度の者でも簡単に使える。実例を挙げるとすれば、”認識障害魔法”がそれにあたる。麻帆良に張り巡らされた結界もそうだし、魔法の秘匿のためにも、幻惑魔法で”本来可笑しいと感じるものを普通に感じさせる”のだ。

だからこそ、俺は幻惑魔法を使う。……機械関係の物で盗聴なりされてたら面倒だったが、（多分だが）使われている魔法は遠見系の魔法だろうから、この部屋全体に”大人しく本を読んだり眠ったりするネギ。部屋はござっぱりとしている”という具合の幻惑を掛ける。

レジスト？されないよ。だって、相手自身に掛けるんじゃないって、”部屋”という無機質で意思を持たない物質にかけるんだからな。実際この部屋に来て魔法の基点を壊そうとしない限り、幻惑はかかったままだ。

……幻惑魔法の基点は部屋の四隅に置いて、その四隅を覆い隠すように認識障害の結界をはるか。その基点は…ランプの底にでも隠しておくか。

（あ……俺そこまで魔力の扱い慣れてないんだっただけ）

ぬう、魔力が漏れないようにリムに頼んどくか。いや、ここは幻影の名のファントムの力も借りよう。俺達全員で魔法を使ったら上手いこと魔力も隠せるだろうし……いつそのことリムとファントム

に任せて楽でもしてるか？

（嗚呼……頼んだ）

（了解だニヤ）

（任務、了解）

……よし！俺は寝るか！

## 第5話 他愛もない話

「おいしょつと」

いやあ、バニシユで姿を消してあるから周囲の視線に曝されることもなく、心置き無く校舎の中を歩けるのはいいんだが……創造するための素材を集めるのには苦勞する。

因みに、今持ってきたのは中庭の土で、中でもより魔力が混じり混んでるものだ。

子供でも大人顔負けの身体能力を得られる『戦いの歌』と言う魔法が存在しているが、まだまだ魔力の練り込みが甘いようで、満足できる効力を得られてない。

いや、抑何そもそもも無いと思われる場所から魔力が感じられるとか、その魔力の塊が移動してう！？となると、その話を聞き付けて校長他有能な部類に入る方々が捜査に乗り出してしまふ可能性があり、迂闊に使用できないのだ。

「マスター、持ってきたニヤ」

「ありがと、そこに置いといて」

だからリムとフロントムの二匹(?)には自分では採取不可能と思われる素材の収集や、周辺の警戒やらをしてもらっている。とにかく使えそうな物やら特別魔力の籠ったものがドンドン集まってくるが……ほんと、倉庫とか創りたいなあ。

「まずはこの土を金属類にするから、『土生金』」

と言ってもまんま『金』なる訳じゃなく、その土の成分で一番比重の高い物が金属として生成される。まあ、何が出ようともしその後創造で金に変えるんだが。

……この赤茶けた感じからすると銅かな。赤っぽかったしな。それにしてもこの銅……なんて粗い（笑）初めてにしちゃ良いできだと思っけど、何かの素材としては……うん、使えないな。

「創造、『金』」

効果音半端無い。どっかの錬金術師みたいにバツクにバリバリバリッ！ってなってる。

「おお……」

創造を終えた俺の目の前には、どこからどう見たって完全に金の延べ棒が！恐る恐る手にとって見るが、金属らしくずっしりとした重みが伝わってくる。純度の調べかたなんか知らんから何とも言えんが……これが、ブルジョア（笑）

さて、ここからが問題だな。『金の針』を創るにしても、実際に実物を見たことがあるわけでも無いから、自分の創造に任せるしかない。

長さは大体10cm位にして、出来るだけ魔力を籠めて、書庫で見つけた石化解除の術式でも書き込んで創造してみるか。

「創造、『金の針』」

目の前で金の延べ棒が薄っぺらああ……く延びていき、厚さが3mm程度になったところで表面張力のように一本の金が離れ、残った金塊は物理法則に従って木製の床に落ちた。未だ宙に浮かんだ

まま創造が続いてる金は徐々に形を成していき、魔法をかじった程度の俺ですら感じることでできる魔力を放っている。

(これで誰も来なかったら此処の警備はしようもないってことになるのか?)

そこら辺は全部リムたちに任せてるから俺は何も分からないんだが……魔法に関してピッカピカ一年生に出し抜かれてる?魔法先生たちには是非!『乙!プヒww』とか言ってるやうでしゅ。

「うーん……できたのは良いんだが、ホントに効くのか?これ」

一種の棒手裏剣ですって言っても違和感はない。少々高価過ぎやしませんか、とは思っけども。

「ま、ホントに効いたとしたら『創造』は脅威足り得るスキルには成る。……金の延べ棒創りまくって売っぱらおっかな。それだけで一生暮らしていけるだろうし」

あれ?この思考は引きこもりと同じなのかな?

あ。

FFの魔法が使えるなら別に金の針とか創らなくてもエスナ使えば良かったのかな?

「嗚呼……あ、いや、目立ったら死亡フラグが舞い込んできそうだから止めとくか」

リムに誰も居ないときを見計らって忍び込ませて、村人たちに金の針をぶっ指してもらおうか。

金の延べ棒とまでいなくても、この世界に存在してるマホネツト？なるものにアクセスして、俺が創る魔法具とか売り出せば良いかな……名義は適当につけて、そこら辺で売ってる物より断然質が良くて安いものを！

各地で商売上がったりになって狙われるかもしれないから程々にしよう。

「創造、『金の針』」

取り敢えず今は残ってる金塊で金の針創っちゃって……あと何しようかな。あんまり材料持ってきてなかったし。かといって魔法の勉強はなあ……また書庫に不法侵入しに行くか！

「大人しいのお」

一人の男性がお茶を啜りながらほのぼのといった感じに呟いた。その男性とは現メルディアナ魔法学校校長である。

その校長が目になっているのは、この学校に新しく入学した一人の少年に関する資料であった。



「『成績優秀、態度も良く、魔法実習も他の生徒の先を行く』……  
か。まるで奴の息子とは思えぬほどじゃな」

ネギ・スプリングフィールド。

この学校の大体の者がかの英雄の再来かと期待している延び盛りの少年。

……少年だからこそ、年相応の遊びや友達など、魔法や勉強だけでなく喜楽も味わって欲しい。そう願うのは彼の本心だが、それを許さぬと言わんばかりにMM元老院から催促が来ていた。

「まったく、将来の明るい子供を向こう元老院に送るなぞネギの人生を潰してしまっただけだと言うのに、どうして儂が応じると思ってるんだらうか」

そう言い、しみじみと遠くを見つめる。

脳裏に過るのは嘗てこの学校を中退して飛び出て行ったナギ・スプリングフィールドの姿。

魔法なんて大体4〜5個しか覚えてないただの悪餓鬼だったのに、いつの間にか世界中から英雄とまで呼ばれるようになり、今は生死不明の行方不明。

「……ただの馬鹿なんだがなあ」

親のような立場に立って考えてみたとしても、或いは当時奴の教師だったことを思い出しても辿り着く答えはただ一つ。

「うむ、奴は馬鹿だった」

校長にできることは一つ。

「願わくは、あの子がナギのようにならなように祈るうか」

そう言いお茶を啜る校長の背中には、幾ばくかの哀愁が漂っていたそう。

魔法の授業はどうしてあもつまらないものなんだろうか。

もう魔法の危険性云々の説明をしろとか言わないから、せめて初級でも良いから詠唱呪文を教えてくださいよ。

因みに、始動キーは既に決めてある。そこは考えるのが面倒臭かったから原作通り『ラス・テル・マ・スキル・マギステル』にした。

暇だし、すること無いし………適当な無詠唱魔法で先生に気付かれないように行使する練習でもするか。

（えっと………読心術で良いか。おら、この野郎、喰らいやがれ！『読心』！）

なんとなく発動した読心術は、ちょっとした魔力の波となり教壇に立っている教師のもとへと真っ直ぐ伸びていく。何かしらの異変を感じたらしい教師は一度此方を見るが、俺を含めた全員が魔法発動媒体らしい物を持ってないので、再び黒板へと顔を向けた。

(子供しかいないし、ステッキ以上に高価な媒体は持っていないだろうし……気のせいかな)

おっし、成功だ！

グフフ……お前の考えていることなんて全てお見通しよ！後は教師から得られる情報でも聞き取ってノートに書き込んどくか。無論、日本語でな。

今俺が持つてる媒体は幾つかある。

一つは机の前の方に置いてある魔法使いっぽいステッキ。先端に星形の媒体が付いているタイプだが、俺の魔力だと中級魔法以上の魔力に耐えることができなくなるような物だ。

二つ目が創造で創った万年筆型の媒体だ。普通に万年筆として使用することはできるし、媒体は内側に隠れているので実際に取ってみなければ分からないだろう。

そして最後が靴型の媒体だ。靴の中に入れる敷皮を魔法媒体として使えそうなものに変えて創造。結果、何も持っていなかったとしても魔法を発動できるようになったのだ。

(それにしても、この年で髪の毛について悩まないといけないとは……最近、生え際がなあ)

……ごめんよ、名も知らぬ男性よ(知らぬ間に自己紹介的なものは終わっていたんだから仕方がない)。ただ正義を振りかざすだけの奴だと思ってたけど、そんな深刻な悩みを心に抱えていたんだね  
(笑)

今度育毛剤が手に入ったら匿名で送ってあげよう。勿論、貴方の  
仕事用の机の上だね。

（はあ……確かに僕は基礎的魔法理論は得意だけど、底が見えない  
英雄の息子の相手は荷が重いよ……どうせだったら一二を争うゲネ  
ヒー教授かシュワルツ教授、若しくはランドイツ博士に任せたい  
なあ）

何々？今の三人については名前を覚えておこう。一二を争うって  
ことは、この学校の中でも上位に位置する魔法使いなんだろうし…  
…どういった系統の魔法を使うのかまで知りたいけど、そこまで高  
望みはできないか。

お？もう終了時間か。

（解除）

これで良しと。いやあ、珍しく楽しい授業になったし、今回ばかりは先生にお礼を言っても良いかな。そうだ、育毛剤をお礼にすれば良いんだな！頑張って努力したまえ。

「お久しぶりです、ネイルさん」

「うむ。お主も元気そうで何よりじゃが……どんどん老けていくの

お

「はは……それは、まあ、努力の結果だと思つてください」

校長室には三つの影がある。

一つは高畑・Ｔ・タカミチ。この場にネギがいたら表向きの本業はどうしたと嘲笑われるか、早いところ咸卦法を見せやがれと強要される……だろう。

そのタカミチが座っているソファの反対側に居るのがメルディアナ魔法学校校長、ネイル・スプリングフィールドである。ネギなら……お前さんが得意とする魔法とか、書庫に無いような魔法の実演してみる！できないんだつたらただの耄碌爺だな（笑）なんて言われるに、違くない。

そして最後は、校長の後ろに立つてお茶を淹れているドネット・マクギネス。いつもは校長の頼れる秘書として働いているが、ネギはねえ……結婚してください！つて言い出すかな（笑）街中で会つたら十人中九人は振り返るだろう美貌を持ち、尚且つ頭が良い。何故独身なのか問い質したい気持ちで一杯です。

「ところで、ネギ君はどうしてますか？」

「うむ。まるで奴の子供ナギとは思えんほど良い子じゃ」

タカミチが特に尊敬しているナギがボロクソ言われているのを苦笑して聞いていると、ドネットがお茶とともに資料らしき紙を渡してきた。

「これは？」

「それはネギの普段の行動や成績について書かれてある。隣のは中退する前のナギの成績じゃよ」

「……………は、はは……………いつもアンチヨコ見てましたし、ナギさんならこの成績でも可笑しくしないでですけど。ネギ君は非常に優秀ですね」

今タカミチが見ているのは当然ネギのものだ。ある程度付き合いのあったナギの成績は大体分かっていたし、見る必要も感じられなかった。

『初めて習う魔法でも、まるで最初から知っていたかのように使いこなし、詠唱をする度に魔法の密度が濃くなっていく。その修正率は、天才の一言では済まないように思われます』

『見たこと聞いたことを、一度で完全に暗記しているように思われる。しかし、ただ闇雲に勉強に取り組んでいるわけでもなく、休むときは休み、習うときは習っている』

ナギの資料と見比べながら数枚の資料に目を通したタカミチは、思わず目を瞑って溜め息をついてしまいそうになった。

(嗚呼……………ナギさん、ネギ君は確実に成長してますよ。寧ろ、貴方よりも優秀ですが、そこは貴方に似ていなくて良かったです)

もしこれだけを聞いていたら確実に『雷の暴風』がタカミチを襲っている。確実に三本以上は。

と、資料から目を離したことから読み終えたと判断したネイルは、次の話を切り出した。

「しかしのう……………この頃、教師の一人がつまらなそうにしているよ

うに思えると報告してきたんじゃない」

「と、言いますと？」

「あの子の修得速度は回りの子供たちの追隨を許さん。それが原因で授業内容に飽きているんじゃないかなろうかと推測しておるんじゃない」

報告をしたのは魔法理論を担当している教師の一人、エドワードという教師だった。

彼自身知るよしもないが、彼はネギの気紛れによって一番始めに読心術を掛けられある悩みを知られてしまった男性だ。

「そこでじゃ。タカミチ殿にあの子に会って話を聞いてきてもらいたいんじゃない」

「僕が、ですか？」

「一度会ったことがあると聞いておるし、お主ならあの子もそう邪険に扱うこともなからう。なに、他愛もない話をしてくれば良いだけじゃよ」

「まあ、僕としてもネギ君に会っておきたかったですから……そのお話、承りましょう」

「うむ、宜しく頼むぞ」

「何故だ!？」

振り上げた拳を勢い良く降り下ろし机に叩きつける。整理されて

置いてある小物が衝撃で一瞬浮き上がる。

周りには誰もいない。

それが彼の感情を露にさせる。

そんな彼の表情から一番最初に読み取れる感情は焦りだ。

「誰にも言っていない……あの人にも、彼にも、いや……誰にも言っていない！」

彼、エドワードがその視線に捉えているのは一本のビン。そのラベルに書かれてある文字が更に彼の心を冷え上がらせる。

「一体誰なんだ！僕の知らない内に、職員用の机の上に

『育毛剤 DX』

を三本も置いていったのは……っ！！」

彼が今まで必死にならなければならぬように気を配りながら髪の毛を増やそうと研究を続けていた。それがどうだ。今回の名も知らぬ奴



のお節介によって全てが崩れてしまった。

まあ……彼は隠しているつもりだが、ほとんどの人は彼の身に宿っている河童の存在には気付いていたし、机に上がっていた薬剤を見た全員が、

「早くお皿に草が繁って欲しいねえ」とか

「不毛なる大地にお恵みを」

なんて言いながら十字を切る、キリスト教への信仰が厚いものかいたりとか。

「くそ！僕の完璧な擬態があああああああ！！？」

その日、日付が変わるまである男性の虚しい叫び声が聞こえていたそうだ。

## 第6話 僕の才能って……

これからしばらくの間、俺たち生徒には数日間の休みが与えられる。無論、俺は一度村に帰りたいと思っている。いや、帰らないとネカネさんが超恐いからってのが一番の理由だが。

前、俺がネカネさんとこに厄介になつてた時、少し遅い時間に帰宅してしまつたときのあの顔……目の中に光を感じなかった。むしろ、そこら辺に屯してそうなゴロツキよりも、いや、ラスボス以上の威圧感があつたね。

まあ……なんとかこの肉体の初体験なるものは守りきつた。俺にSE KKYOしてるとき、次第に頬が赤く染まってくかと思えば、段々目が潤んでいくんだからなあ。見た目は清楚な感じなのに、中身はSなんだろうか？

それから俺は時間を厳守するようになったが、ネカネさんの表情に嬉しさ半分寂しさ半分感じられるのはどういうことだ？

……ん？あれはネカネさんか。久し振りに帰ってくるからって、俺のことが待ちきれずに迎えにきたのか？それにしても、女性だけで何の話をしているんだろうか。

「そつやってネギも大人に成長するんですね……」

155。

何故にそこだけ無理矢理強めて言いやがる。回りにいる人たちは

首を傾げているが、それもあつて完全に一人だけ可笑しいこと想像してゐるのが手に取るように理解できる。

いやだなあ……いつ食われるか警戒しないといけない家族ってのは。それでも家族は家族。意を決して声を掛ける。

「ネカネさん！」

「ああ、ネギ！」

あれ、どうしてそんなに感極まっているんだい？ちよ、こっちに向かってくる最中誰にも見られてないからっていちいち頬を赤くしな……なっ！？息遣い荒っ！？ちよつと、誰か助けて！

「あの子が……」「確かに保護欲をそそられるわ」「うふふ、可愛いわあ」「羨ましい……」

……わああああおう……取り巻きは完全にネカネさんにやられていたようだヨ。

ふ……ここで俺の初めてが散り逝くのもまた運命……そんな言葉で納得できるんだつたら早々に俺の初めては天に召されてるんだよ  
お……！

こうして、ネギ・スプリングフィールドの命を掛けた聖戦が  
勃発したのであった

「ネギま………完！」

「おおおい、ネギ君！」

「は！？この声は………救世主タカミチだ！」

「ちっ………」

あれ、なんでネカネさんは舌打ちをしたのかな？俺に聞こえてるんだけど。意識して聞かせたのか、はたまた俺の意識の奥底に何かを植え付けようとしているのか？

「久しぶりだね！タカミチ………助かったよ、ありがとう」

「うん？それはどういう意味だい？」

「ううん、何でもない。気にしないで」

「そうかい？」

うん、そうそう、あまり気にしないでね。少しでも真相を知ろうとするとネカネさんが般若化しちゃうからね。

「ところで、どうしてタカミチは此処に？」

「久しぶりにウェールズによる機会があったからね。ネギ君がどれだけ成長したのか気になって此処に来たんだ」

そう言うタカミチは懐かしそうに、それでいて嬉しそうに俺の事

を見ている。……こ、これが普通の反応だ！やっぱりネカネさんが異常だったんだ！嗚呼……タカミチの言葉で精神的に落ち着いていく感じが如実に分かるよ。

「ちょ、ちよつと……あれってもしかして」「ええ、その可能性は高いわね」「まさか、三つ巴になるのかしら」「でも、確かあの子には幼馴染みの女の子がいるって聞いたわよ」「その話、詳しく聞かせて頂戴！」

もうホント、黙ってくんねえかな、あいつら。

精神的ストレスを減らすことができたと思った矢先の迎撃は、俺の心にちまちま槍となって刺さり穿ってきた。もう、口を開けたら魂が白い煙となって出ていくんじゃないかなろうか、なんて馬鹿な考えが浮かんできたところでようやくネカネさんの家へと出発した。

家へはタカミチの運転で向かうことになったが、ナビ役としてネカネさんが助手席に座り、俺は後部座席に腰を下ろした。

これで家まではゆっくりできる。なんて思ったのだが、やはりネカネさんが邪魔をしてきた。

俺が後部座席の左側にいるとネカネさんはサイドミラーで俺の姿を見てくるし、その視線を避けようと右側に移った俺を待っていた

のはバックミラーに映ったネカネさんの両目だった。

(あれ？車の中は俺にとって檻の中？)

ミラーに映った目だけを見ても、うつとりしてるのは一目瞭然だった。最近巧く扱えるようになってきた読心術を以てネカネさんの深層心理を読み取ってみたいとは……夢にも思わない。いつ黒化するか気が気じゃないってのにそんな分かりきった事をするつもりはない。

「そつだタカミチ。前に言ってた”気”の事について教えてよ」

「なんだいネギ君。君は気に興味があるのかい？」

「まあね。それに、どれだけタカミチが凄いのか知りたいしね」

そつ言つてタカミチと二人で笑い合う。

いや、そつでもしてないとネカネさんの視線に意識が絡め取られ

そつで……嗚呼、早く家まで、もっとスピードをあげてくれええ！！

じわじわと減っていくHPがイエローゾーンを通り越してレッドゾーンに突入しかけていた時、ようやく俺は視姦と言う名の苦渋から解放された。家の中では特にすることもないため、ネカネさんが腕によりをかけて淹れてくれた紅茶飲みながら適当に寛いでいることにした。

早いとこタカミチに気を、しいては咸卦法を実演してもらいたい

し、それを理由にネカネさんから少しでも離れたい。さすがに四六時中側にいると精神が衰弱してしまいそうだ。

「それじゃあネギ君。君に気を見せようか」

「うん！」

「それじゃあネカネさん。僕とネギ君で少し離れた場所に行くよ。日が暮れる前には戻ってくるから安心してください」

「わかりました。じゃあネギ、あまりタカミチさんに迷惑をかけないのよ？」

「うん、わかってる」

ヒヤッツホーイー！！

いやあ、やっと務所から出られるような感じだ。体感時間が半端なく長かったから1〜2年は服役してた気分だ。……勿論、生前では真つ当な人間だったから刑務所にぶちこまれた事はありませんよ？

「そうだ、ネギ君。君は学校で良い成績だって聞いたけど、どれぐらい魔法を使えるようになったんだい？」

「ううむ……馬鹿正直に答えたら大変な事になるんだろうな。まさか初級魔法どころか上級魔法すら使えるかもしれないとは思ってもないだろうし。しかも、いくら才能があると言っても俺まだ6歳だし……」

「詠唱有りの『魔法の射手』が10本、それと『戦いの歌』が60秒くらい効果が続いて、あとは……初級魔法の『治癒』ぐらいかな」

実際に使える魔法の中でも初級に分類される物をチョイスしましたよ。他にも人払いや認識阻害系の結界とかFFに出てくる魔法は粗方使えるが……さすがにそこまで言わなくても良いだろ。

ん？

タカミチ、口からタバコが落ちたぞ。……俺、タバコの煙好きじゃないから踏み潰しても良いよな。タカミチの都合なんて知るか、おらあつー！！

「タカミチ、止まってないで早く行こうよ」

「あ、ああ」

もう少し使える魔法少なくても良かったのかな？……おいタカミチ、タバコ踏まれたからってそんなに悲しそうな顔をするんじゃないやありません。只でさえダンディなのに、そんな顔だとブランコに座って黄昏るおじさんだぜ？

まさか、ネギ君がここまで魔法を使えるようになっていたとは……ナギさんとは違って本当に優秀な子に育ってるみたいだ。嗚呼、見た目がナギさんに似ているだけで頭脳はアリカさんから受け継いだのかな。そうじゃなきゃ、ネギ君の頭が良い理由が分からないしね。

確かに魔法サキタ・マキカの射手は基本的な攻撃魔法に属するけど、極めていけ



ばナギさんのように大魔法だと思わせるようなものまで昇華する。  
ふふ……ネギ君将来が楽しみだ。

「そうだ、ネギ君。学校の授業はどんな感じだい？」

ネイルさんに頼まれたことを聞いておかないと。周りの子と比べると一足跳びで魔法を勉強してるみたいだし……うん？初級魔法を教えているなんてあの報告書には書いてなかったような……なら、ネギ君はどうやって？

「うんとねえ……簡単な魔法とか理論ばかりだし、似たような説明ばかりで面白くないかな。……嗚呼、タカミチ。タカミチだから言っておきたいことがあるんだ」

「なんだい？」

「ほとんどの先生がそうんだけど、あまりに自分の正義を掲げすぎてるような気がするんだ。それに、魔法が危険なものだって一言も言わないし」

「なんだって？……やっぱり、あの大战が過ぎてから魔法使いの『マギステル・マギ立派な魔法使い』に対する考え方が一変した事が原因なんだろうな……」  
「……つて、そうじゃない！重要なのはネギ君がその事に気付いて、しっかり自分で考えることができるってことだ！」

僕力だけじゃ、今この世界に蔓延ってる正義論を覆すことはできないが……このままネギ君が良い方向に育ってくれば世界は、もしくは魔法世界の崩壊の救済も可能なんじゃ！……もしそうなっ  
てしまったら、僕達対戦を経験した者の尻拭いをさせてしまうこと  
になってしまふ。

「タカミチ、この辺りで良いんじゃない？」

「え……あ、ああ、そうだね。それじゃあ今から気について説明するね」

……考え事をしているうちにちょうど良く開けた場所に着いていたようだ。ネギ君に声を掛けられるまで気付かないなんてね。

「良いかい？気は魔力と同じように自分の中から引き出すことで扱うことができるんだ。違うのは魔力が精神力を鍛えることで、気は身体を鍛えることで其々最大量を伸ばすことができるんだ。それじゃ、今から気を纏うよ」

気を纏って身体強化をするのは初歩中の初歩だけど、ネギ君は魔法を学んでいて『戦いの歌』カウントゥス・ペラークスを使えるわけだから、魔力と相反する気を学ぶ必要はないと思うけど……

「これが気だ。わかったかい、ネギ君」

「うーんとねえ……これか？いや、こっちか？……嗚呼、わかった！これだ！」

「……は？」

ネギ君が……気を纏ってる？まさか、僕がこうして実際に気を纏ったのを見ただけで？そんなまさか！

「ね、ネギ君。すぐに気を纏えるなんて凄いなあ」

「実は前に気に関する書物を読んだことがあるんだ。タカミチが言

つてたみたいなお事も書いてたけど、気は即ち生命力であるってのが  
分かりやすく覚えてたんだ」

「そ、そうなんだ」

気に関する知識があつたのか……僕が実演したことがきっかけに  
なつたのかな？でも、ネギ君だったら独自に気を纏えるようになってた  
たかもしれないけどね。

「なら、そんなネギ君に僕の取って置きを見せてあげよ」

「取って置き？」

「嗚呼。相反する魔力と気を合成することで強大な恩恵を得ることが  
できる……『咸卦法』だ」

瞬間、僕の回りに吹き荒れる風。

シユンタクシス・アンテイケイメノイン

咸卦法 気と魔力の合一。

この高難度技法を修得するにはエヴァの力と別荘を借りて、何年  
もの修業を要したけど……一歩でもあの人たちに近付くために手に  
した力だ。

「お………凄いなあ、タカミチは」

まだ6歳の君に、僕が積み上げてきたすべてを抜かれるのは何時  
になるんだろうかと考えると……結構早い段階で抜かれそうだなあ。

はあ………僕ってやっぱり才能なかったのかなあ。

第6話 僕の才能って……（後書き）

あまり深く時期設定が……  
原作開始あたりまではこんな感じかな。

## 第7話 行き過ぎ注意報

タカミチに気の実演をしてもらったネギです。いやあ……生で咸卦法を見れるとは思ってなかったが、あれは凄いわ。魔法を、力の一端をかじっているものだからこそ分かる凄さってもんだな。

魔法世界で起きた大戦でジャック・ラカンが生身で艦隊を落としまくったのも、こういった力が在ったからなんだろうと染々感じたよ。

あのは俺ができると言った魔法を少し披露したら褒められて嬉恥ずかしく思ったり……まあ、お陰で暇をもて余したりすることが無くなりそうだし、その点は感謝しておこう。

で、タカミチは俺を家まで送り届けた後、少しばかりネカネさんと話を交え、仕事があると言って帰ってしまった。

……タカミチイイ！あんたが帰ったら誰が俺の貞操を守るんだよお！

すまん、かなり取り乱した。改めて考えてみれば俺はまだ6歳。いくらなんでも致してしまうには早すぎるってこった。ハハハ！……ホントに大丈夫かなあ？

「ネエエギイイイイ！」

「（げっ……）アーニヤ、久し振り！」

「ねえ、ネギ。なんか違和感あったんだけど……」

「え？気のせいじゃない？」

「そお？なら良いんだけど」

なんだってんだ！アーニヤは タイプだったのか！？それにしても、今ここでアーニヤがやって来るとは……ただの幼馴染みとして来てくれているならまだしも、ここにおわすはピンクの妖精。今の俺の状態を簡単に言い表すなら『前門の虎、後門の狼』だな。

間に挟まれた俺は葱みたいな野野菜の如く食われてしまっう位地に居るんだらうか？……はあ、公的に死亡となつて居る我が父上が羨ましいわ。美人な妻と愛の逃避行だらう？

男として！一男子として！

我が父上はリア充だと面向かって声を荒げてやりたいわ！

「どうしたの？急に黙りこんじゃって」

「……前よりもアーニヤが可愛くなつてて驚いちゃったんだ」

「ば、いきなりそんなこと言うんじゃないわよ、馬鹿ネギっ！」

……と、口ではそんな事を言つても顔は真っ赤ですよ、アーニヤさん。良かった、この切り返しにアーニヤの意識を逸らすことはできたようだ……って、ネカネさん？怖いから微妙に黒いオーラを垂れ流さないでくれないかな？間に俺がいるから直撃を食らつてるんだが。

……あれ？俺の腕をがっしり掴んで、って、え？

「ねえ、ネギ？私は？」

「ど、どうしたの？ネカネさん」

「……ネギ、これからは私のことはお姉ちゃんって呼びなさい。良いわね？」

「え？そ、そんないきなり」

「良いわね？」

「う、うん、分かったよ……お、お姉ちゃん」

ちよー怖ええ!!!

ガチで目が笑ってなかったんだけど！てか、6歳の子供ガキに何を期待してるんだネカネさんは！……そんなんだら彼氏ができないんじゃないんだろうか。才色兼備のネカネさんなら良い相手はすぐにも見付けられるだろうに。

ちよ、ネカネさん……お姉ちゃんって呼んだだけでどんだけクネクネしてるんすか？端から見たらただの変態だということに気付けないんだろうか。

アーニヤはアーニヤでぶつぶつ呟いてるし……お願いだ、タカミチイ！仕事なんてどうせ『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』関連だろ！？そんなんどうでも良いから戻って来てくれええええ！！

「クシヨン！……なんだ、誰か僕のことでも噂してるのかな？」

「喰らえええ！ヨライス・テンベスターズ・フルグリエンス雷の暴風！！」

「おっと……」

瞬間、タカミチが立っていた場所を魔力の奔流が通りすぎていく。その直線上にあるもの全てを飲み込んでいくその様は、まさに暴風そのものである。

「やったか……！」

「まだまだ修業不足だね」

「なっ!?!」

ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ直伝

しちじょうたいそむおんけん  
七条大槍無音拳

一条だけでも先程の雷の暴風の威力を越えるのではないかという拳圧が、一瞬にして七条打ち出され、襲い掛かる。常時展開されている魔法障壁に加え、咄嗟に展開した幾重にも連なった対物理障壁は、しかし、その全てが打ち貫かれた。

「がああっ!？」

断末魔に似た叫びが周囲に響き渡る。

そして、虚しく響いた叫びも途絶え、タカミチの頬を静寂の風が撫でていった。

「ふう……ここにはもう、残党は残ってないかな」

一人辺りを見渡したタカミチは、もう敵はいなくなっただろうと思いき、踵を返して去っていく。後に残ったのは、荒れ果て崩れ落ちた建物だけだった。

「はあ……ようやく離れられたよ」

「災難だったニヤ、マスター」

「ホントだよ」



虎と狼から無事解放されたネギです。一時はどうなることやらと思っただが、二人の意識を現実世界に無理矢理連れ戻すことで事なきを得た。……もしこの生活が続くのなら、ストレスによる弊害でまた病院のお世話になってしまうことになるやもしれん。まだ6歳なのに。

まあ、今は自分の部屋にいるからある程度羽目を外せるし、リムがいるから話し相手にも困らない。ファントムには素材集めやら情報収集をやらせている。あとは原作に出てきたあのオコジョのできることを知ることができたら知ってほしいというところだ。

原作の流れに乗って奴を雇うことで、何も知らない一般人を巻き込ませる……なんて事にはしたくないし、何よりさせられているという感じが否めないのです。あんなに気がならない。あの学園長の思惑に乗せられるぐらいなら立派な魔法使いなんかじゃならん！……いや、面倒だしなりたいたいと思わんが。

「取り敢えずネカネさんが突撃を敢行してくる前に幻術と結界を張るところかな」

さすがに夜這ゲフンゲフン……寝込みを襲ってこようなんてのはしないと思うが、一応念には念を入れておかないと、目が覚めたら後の祭りだ。「責任、取ってね」なんて言われないうちにおかかないと。

「これでよし……どう、リム。この術式の何処かに綻びとか無いかな」

「大丈夫だと思うニヤ。これニヤら、よほどのことがニヤい限り破られることはニヤいニヤ。ただ……」

「ただ？」

「マスターはえげつニヤいニヤ」

ハハハ！何を仰るやら。寝込みを襲おうと考えなければ良いのだよ、考えなければね！

つい出来心で、昔見た空飛ぶ黒いGがわらわらと出てくる幻術にしてみましただけで、別に実害が有るわけでもないし。まあ、魔法学校で上位に食い込んでるネカネさんがこの稚拙な魔法に掛かったら、それはそれで俺は笑笑わらわらとネカネさんを観察しているが。

「マスター……笑顔が黒いニヤ」

「おっと、気を付けないと」

これで日頃の鬱憤が晴らせるなら良いってもんよ！……後が恐いけど、まあ、なんとかなるかな？

幻術は今説明した通りだが、あと二つ予備で魔法を使っている。一つは防音結界。さすがに叫ばれたら近隣迷惑になるからこれは必須だ。ちなみに、俺の中にやらないという選択肢は存在していない！もう一つは、もしもネカネさんに幻術を破られたときの対処用術式だ。幻術を破るにはどうしても魔力を使うわけで……その時の魔力に反応して『眠りの霧ネクラ・ヒュフノーティカ』が発動するよう幻術に組み込んでおいたのだ。

「……もつすることないし、寝るか」

取り敢えずこれで今日一日を乗り越えられるだろうと判断し、そのまま就寝することにした。

「良い？静かに入るのよ」

「大丈夫です」

扉の前で動いている影が二つ。片方は綺麗なブロンドの髪をそよがせ、もう一方は燃え盛るように真っ赤な髪を纏っている。

二つの影は極力物音をたてないように気を付けながら歩を進め、彼女たちにとつていとおしくて堪らないと感じている少年が眠っている部屋の前までたどり着いた。

「良い？私は左側で、アーニヤちゃんは右側だからね」

「はい！」

もちろん、ネギはこんな話は知らないし、聞かせようとも思っていないため、小声で話されている。

そもそも、何故アーニヤがこの家にいるかと言えば、ネカネに勉強を教えてもらうことを名目に二人でネギの寝込みを襲いたいと考えているからである。そんな二人の間には、”抜け駆け禁止同盟”が組まれている。

「それじゃあ……行くわよ」

「うん」

（邪な方向で）意を決した二人は、その瞳に炎を灯して進むのであった！

そして二人は静かに開けた扉の隙間に体を滑り込ませるような形

で部屋へと侵入した。その際、妙な違和感を感じたネカネであったが、すぐ目の前に獲物<sup>ネギ</sup>が眠っているということもあり、意識はネギに固定されていた。……ネギが幻術なんて仕掛けるだなんて思っていないのも大きな理由だろう。

ピト

「…………え？」

何かが二人の肩に落ちてきたような感覚がした。いきなりのこと二人は驚き、その何かを恐る恐る確認しようと首を回して 背筋に氷を入れられた感覚に囚われた。何せ、目の前には黒光りするGが、活発に蜂の巣の中を動き回ってる働き蜂の数ほど蠢いているんだから。

「キヤアアアアアアアアアア!!?」

「イヤアアアアアアアアア!!?」

……………

……………

……翌朝、二つの屍がネギの部屋に転がっていましたとき。

「あれ……………なんでアーニヤまでこんな所に？」

ネギは二人が目覚ますまで首を傾げていたが、その事をアーニ

ヤに尋ねても満足できる答えが返ってこず、始終唸っていたそつな。

第8話 悪夢（前書き）

……あれ？どうしてこうなった！？

## 第8話 悪夢

ある日の夕暮れ。

幾つかの結界が張られている校長室の中には穏やかな空気が流れており、椅子に座っている校長自身お茶を飲みながら穏やかな雰囲気を楽しんでいた。

そんな一時も束の間、誰かが校長室の扉を勢いよく開けて入り込んできた。その気配を察していた校長はその者 ドネット の表情を見て僅かに眉を寄せた。

「校長！」

「なんじゃ」

見るからに焦りの表情を浮かべている。

校長が身を任せていた静寂は一瞬で破られ、次に校長室を覆ったのは殺伐とした空気だった。

「それが、二人の生徒が何らかの理由で倒れ、うなされているようなんです！」

「……それでどうしたのじゃ？それだけであればお主が慌ててここに駆け込んで来る理由にはならんはずじゃが」

多くの才ある子供たちが集まる魔法学校では、今ドネットが話したような内容の問題が起きることは多々あることだった。時には子供たちが喧嘩をして魔法を使用するなんてことがあったり、はたは魔法書庫に入り込む不届きものが間違っつて禁書と指定されているものに手をつけて倒れ、そのまま息を引き取る……なんてことも極稀に起きることだった。

それ故、ネイル（校長のことだよ）の秘書として何年も勤めてい  
るドネットがこんなにも慌てることは珍しいことでもあり、それが  
またネイルにしてみれば違和感以外の何物でもなかった。

「そ、それが……」

「どうせ後になっても僕の耳に届くんじゃ。はつきり申しなさい」

「その、現場にはネギ・スプリングフィールド君が居合わせていた  
ようなのです」

「何っ!？」

ネイルの言葉に幾分か落ち着いたドネットだったが、今度はネイ  
ルが慌てる番となった。

「それで、何があつたのじゃ!」

「い、いえ……この件に関しましてネギ君は一切何も関わっていな  
いように思われているようなのですが……どうも違和感を感じると  
ランドイツヒ博士が仰っているんです」

「ランドイツヒ博士が?」

ランドイツヒ博士。

このメルディアナ魔法学校において在籍している教師の中におい  
て『メルディアナの三賢』と呼ばれている者たちがいる。その三人  
の中の一人がランドイツヒ博士であるが、そんな彼が得意としてい  
る分野は支援系統の魔法であった。

「ええ。あの方によりますと、今回倒れた生徒たちは幻術魔法に掛  
かっているそうで……その魔法がかなり精密であり、尚且つ高度な  
部類に入るもので、この学校に在籍している魔法教師ですら同じも  
のを再現できるかどうかという程のものだそうです」

「あの博士がそう言ったのか?」



「はい」

「……もし、その話が何者かの手によって為されたものであるとすれば、一大事やもしれん」

ネイルの額に一筋の汗が流れた。

（もし仮に、何者かがここに侵入したのであれば、それは恐らくあの子を簡単に襲撃できると警告しているものである。じゃがそうとすれば、何故その者はすぐにあの子に手を出さなかったのか……もしや、元老院の者によって手引きされたのか？）

「……分からぬ」

「は？」

「儂の目で実際に確かめるとしよう。倒れた生徒たちのもとに儂を案内してくれ」

「分かりました。では私についてきてください」

「うむ」

時はまだこの事件が起きる前まで遡る。

休みを終えて登校してきた生徒たちが集まり帰省中に起きた出来事や話題で花咲かせている頃、ネギは一人校舎の中を散策していた。特にすることが無かったのが一番の理由だが、前に多大なお節介をしてあげたエドワードさんが血眼になっていたのを見かけ、ちょっとだけ罪悪感を感じ、また『育毛剤DX』をプレゼントしておこうと職員室に向かっていたのだった。

「……！」

「……………」

「ん？」

意気揚々と職員室に向かっている最中、どこからか話し声が聞こえてきた。ネギが歩いているのは確かに校舎の中ではあるが、生徒が集うような教室などがある校舎ではなく離れの方にいたため、本来聞こえてくるはずのない音が偶然聞こえてきたため、ネギの関心はそちらの方に向かっていた。

(どうせエドワードさんをからかうだけだし……行ってみるか)

ネギによる暇つぶしによって一人の尊い犠牲者が出ることもなくなったと言ふべきだろう。……おめでとう、エドワード！

「やめてください！」

「うるさい！お前は黙ってる」

「キヤツ！？」

(……あれ？俺はとんでもない場面に突き当たったのかな？)

今ネギが隠れている場所からは二人の女子と二人の男子しか見えないが、全員がネギよりも年上に見える。まあ、成績優秀……もあがるが、ネギがMM元老院の魔の手に掛かることを恐れた校長の手によって飛び級することになるし、まだ6歳だからほとんどの生徒は皆年上になるんだが。……取り敢えずネギは静観して様子を伺うことにした。

「こんなことをして、私のお父様が黙っていると思ってますの!？」  
「うるさい!俺はお前の許婚なんだ!だから俺がお前に何をしたら構わないだろ!？」

(わぁお……子供の理論と言いますか、ただの馬鹿だな)

あまり相手にしたくないタイプの人間だった。ああいう子供は大体が親に甘やかされているし、甘やかしている親の威光もただならぬほどの物だ。許婚って単語からも、二人はどっかのご令嬢とご息息であるうことは簡単に読み取れるんだが……では、その取り巻きはどのような人間だろうか。

「お、お嬢様……」

「ふん」

……なんとなく分かった。女の子の方はお嬢様の付き人かなんかで、片方の男はしょーもないサブキャラB程度の存在だな。となると、問題は令嬢息子の御二方はどこの家の出身なのかってところだな。助けるに入るにしても、一応俺は面倒な『英雄の息子』って肩書きを持つてるわけだし……ことによっては俺にまで火の粉が降りかかってくるかもしれん。でもなあ、あのブロンドの髪の女の子、どっかで見たことあるんだよなあ……

「そこまで言うのでしたら、エーデルフェルト家の次期当主としてあなたのお相手をさせてもらいますわ!」

(エーデル……フェルト?)

確か、俺が生前好きで見ていたアニメのゲームにキャラとして出

ていたような気がするんだが……そうだ、ルヴィアゼリツタ・エーデルフェルトだ！……Fate/Stay nightのキャラじゃねえか！この世界はどうなってやがんだ！しかもエーデルフェルト家はフィンランドの名門貴族だったはずだし、魔法を学ぶに当たって家に講師を招いて教育することだってできるだろうに。

いや、そもそもこの世界に冬木市とか存在してんのかなあ……聖杯戦争とか死亡フラグ盛りだくさんのルートに乗る気はないぞ。

「ふ、ふふふ……男の俺に敵うと思うなよ！」

光の精霊17柱、集い来たりて敵を射て。『魔法の射手・連弾・

光の17矢』！

「なっ！」

火の精霊15柱、集い来たりて敵を射て。『魔法の射手・連弾・

火の15矢』！

（魔法の威力とか魔力の運用とかに性別は関係あらへんがな……嗚呼、馬鹿だったんだな。取り敢えず、魔力の乱れによる煙とかが起きてるうちになんかしとくか……」

『魔法の射手』 同士のぶつかり合いにより吹き荒れる魔力の奔流。魔法によって具現化された火は確かに熱を帯びており、対する光も鋭い輝きを以って周囲を照らしていた。魔法を撃ち合った二人の間には煙が巻き上がっており、互いの視界を奪っていた。

「どつだ、これが俺の実力だ！」

しっかりと相手確かめる前に自分の持っている力を高らかに誇る。人に対して魔法を使ったという事実が彼を興奮させているのか、

彼の両頬は薄らと赤く染まっていた。

そして次第に開けてくる視界。彼の頭の中には、泣いて許しを請うルヴィアゼリツタの姿だけが描かれていた。しかし、その考えは否定されるとともに、目に映った光景によって彼の思考は凍ってしまふ。

「あ……ああ……」

「痛い……痛いよ……」

真っ赤な血の海に沈む二人の姿。綺麗だった服はともにぼろぼろに破れ、ルヴィアに至っては腹部に大きな穴が開いていた。

「う、嘘だ……」

辛うじてまだ息があるといった状態の二人。だが、今から誰か大人を呼んだところで間に合うかどうかとも分らないし、何より、こんな大怪我を負わせてしまうことになるとは思ってもなかった彼に、この場で最善と成り得る手段を考えることなどできようもなかった。

「う、あ……た、すけ……」

「う、うわああああああ！？」

両手で顔を覆う。目の前が真っ暗になっていくような感じと、自分が今どこに立っているのか、しっかりと地面に足をつけて立っているのかといった感覚が次第にあやふやになっていく。今になって自分がどんな事をしてしまったのかを理解し始め、そして体が震えだし、ガチガチと歯が音を奏で始める。

（そんな……お、おれは、俺は、悪くない。そうだ、俺は悪くないんだ！こんなことをしたのは俺じゃなくて違う奴だったって言えば

良いんだ！)

そして両手を顔からどけ、何かを叫ぼうと息を吸い込み 目の前の光景に、思考が追いつかなかった。

「じじ、は……どこだ？」

目に見えるものは、今自分が立っている足元と、いつの間にか立っていた終わりが見えない階段だった。わけが分からなかった。

いつ自分がこの場所に来たのか。

どうして自分はこんなところに立っているのか。

どうして、自分の体が動かないのか。

「うわっ！か、体が勝手に動いてる!？」

誰かに操られているかのように動く両足は、彼の意思には関係なくただ只管上へ上へと昇っていく。どうにか動くのは頭だけ。しかし、どんなに叫ぼうが、どんなに喚こうが、肉体は階段を昇っていない。そんな中、微かに何かが聞こえてきた。

「……、……、……」

「な、なんだ!？」

うまく聞き取ることができなかった。ホントに微かにしか聞こえないそれは、しかし、階段を昇って行くたびに音は意味を為して聞こえてくるようになってきた。

「人殺し、人殺し、人殺し」

「ひ、ひいいいい!!--」

いくら周りを見渡そうが見えるのは黒一色。しかし、耳だけは老若男女様々な声が重なって聞こえてくる。助けを呼ぼうとしていた彼は、その単語が聞こえてきた瞬間に耳を塞ぎたい思いに駆られていた。

が、遂に彼の眼が、階段の最高点であろう場所を見据えた。

(やっと、やっとこれが終わる……)

安心しきった。心の奥底から彼はこの状況の終焉を望んでいた。いつから、どれだけ階段を昇って来たのか、その間に何度人殺しと叫ばれ罵られてきたのか……それが漸く終わる。

安堵の気持ちで彼を包み込んでいた 頂上の、頭の大きさぐらゐに輪を為した縄が垂れ下がっているのを見るまでは。

「死刑！死刑！死刑！」

「いやだ、やめ……や、止まれ、止まってくれ！お願いだから止まってくれ……！」

されど、足は止まらない。一切速度は変わらず、階段を昇っていただけであった。

再び彼の歯は不快な音をたて始める。

一步……また一步と、確実に彼に”死”が近付いてきていた。

「死刑死刑死刑死刑死刑！」

「うあ、ああああ……！」

そして彼は絞首台へと足をかける。

”死にたくない”……そんな気持ちだけが彼の心を占めていたが、そんな彼に、真つ暗闇の中から一本の腕が差し出された。

「この腕に掴まるんだ」

「ま、さか……！」

その声に聞き覚えがあった。あの時、一緒にいた自分の友達だった。

” あいつが助けに来てくれたんだ！”

歡喜の渦が彼の中に沸き起こった。もう駄目だと諦めかけていた彼のもとに救いの手が差し伸べられたんだから、その手を掴まないわけにはいかなかった。

「う、動いた……！」

あれだけ動かさそうとしても動かなかった自分の腕が、漸く自分の意思で動かすことができた。

” 助かった”……その気持ちに逆らうことなく手を伸ばし、友人の腕をがっしりと掴んだ。

途端、勢いよく引つ張られ、頭が縄の輪の中心を通り抜けた。何時の間にか階段が消えてなくなっていた。そして、肉体は重力に従い下へ下へと落ちていくこうとする。

「があ、あつ、が……！」

” 首が締まる、息ができない”

” 助かったはずじゃ”

声にならない呻きが、空気と共に口から出ていく。息ができず、酸素を取り組むことのできない体が悲鳴をあげる。次第に意識が遠退いていく感じがする。



と、完全に意識がなくなる前に、自分が掴んでいた友人の腕が、次第に暗闇から姿を露にできていた。そこに居たのは、彼が友人だと思っていた人物の、変わり果てた成れの果てだった。肌は爛れ、骨は折れ、口は三日月の様に裂かれていて、目は剥かれて無くなっていた。

「……………ッ!？」

彼が驚きと恐怖に目を見開いていると、ゆっくりと、友人の手が延びてきた。

ゆっくりと……………ゆっくりと……………

そして、その手が止まったのは、彼の右目のすぐ前だった。

とうに限界を超え、意識が薄れていくなか、最後に彼はこんな言葉を目にした。

ねえ……………その目、頂戴

……………

意識が覚醒する。

ぼやけていた思考がクリアになり、平衡感覚が戻ってくる。と同時に、自分がしっかりと何かに立っているという感覚も足から伝わってきた。

「うん……うん、は？」

瞼を上げた。目に飛び込んできた景色は、真っ黒だった。しばし、呆然とした。理解できずに、ただただ呆然と目の前に焦点を合わせていた。

次は、心臓が欲しいな

耳元にそんな声が聞こえてきて、また、足が階段を昇り始めていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8678y/>

---

あれ.....ここはどこですか？

2011年12月2日00時52分発行